

森村泰昌のあそぶ美術史
ほととぎすあそぶせむいせかさ

Morimura Yasumasa:
Want to change the world? Be seriously unserious

2020年3月7日(土)-5月10日(日)

開館時間 9:30-18:00(入館は17:30まで)

休館日 毎週水曜日、5月7日(木)
※4月23日(木)-5月6日(水)まで無休

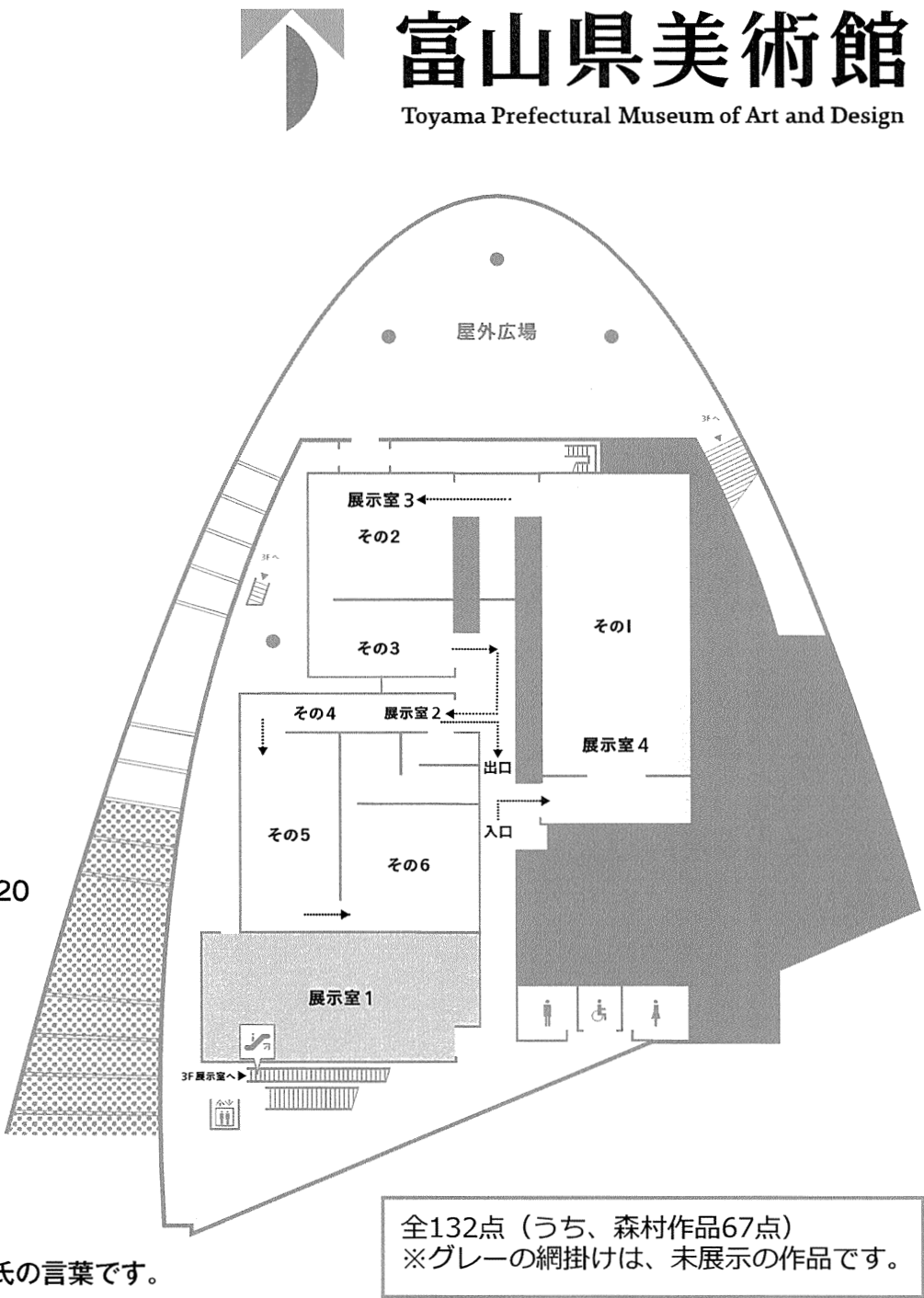
主催 富山県美術館、北日本新聞社、チューリップテレビ

協力 モリムラ@ミュージアム

会場 富山県美術館 2階展示室2、3、4 TEL 076-431-2711
Toyama Prefectural Museum of Art and Design / March 7 - May 10, 2020

[注意事項]

- ・本リストの掲載順と展示順は一致しません。
- ・出品作品は都合により変更があります。展示されない作品があります。
- ・作品には触らないでください。
- ・写真撮影可能なものにはマークをつけています。
- ・特記のない作品は、全て富山県美術館蔵です。
- ・会場のタイトル、案内文等(全てひらがなの文章)はゲストキュレーターの森村氏の言葉です。



作品図版	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
------	-----	-----	-----	-----	-----	-------

その1 かいがの てんじしつ ひっくりかえす

富山県美術館のコレクション(作品の収集)がはじまって約40年。実際に制作されてから100年を超えるものも増えてきました。美術館の役割には、作品を保護・保存し次世代に伝えることがあります。同時に多くの人に展示・公開することも重要な役割です。

富山県立近代美術館からの移転新築、2017年の富山県美術館の開館を契機に、作品の保護を目的に額から作品を外し、ホコリやカビをなくし補色するなど修復作業をした作品もあります。この企画展で展示のミロ《パイプを吸う男》、ピカソ《座る女》、ルオー《バシオン》がそれらにあたります。修復の際に通常みることができないキャンバスの裏側を写真撮影しました。また、ジャスパー・ジョーンズ、ポロックも新しく低反射ガラスを入れ、皆さんがご覧いただきやすいようにしました。フォンタナの作品2点、コーネルは、作品の両面からみることができ大変珍しい額装にしました。

絵の面(表側)を「おもて」、そのキャンバスの裏側を「うら」と森村氏は言います。「おもて」を支えて頑張っている「うら」、画家たちの格闘ぶりの一端を垣間みることができる「うら」にもご注目ください。

なお、ピカソの作品の裏側については、著作権者より「作品裏側に貼られたラベルや記載事項は、廣作者にとって大変有益な情報であるため公開してはならない」と指摘を受け、紹介できません。

絵画作品は「おもて」だけがみられるものですが、「おもて」と「うら」の関係にもぜひ注目して本章をご覧ください。

	ルーチョ・フォンタナ	1899-1968	アルゼンチン	《空間概念—期待》	1962	キャンバス・水溶性絵具
	2次元の平面のキャンバスに、写真のような3次元の世界を描出する伝統的絵画のあり方に疑問を呈した、キャンバスを切り裂いた作品です。単に切り裂いた作品と思われがちですが、裏面に黒色の布地が貼られており、より「切り目」が印象に残るよう、フォンタナの工夫が見てとれます。					
	ルーチョ・フォンタナ	1899-1968	アルゼンチン	《空間概念》	1953	キャンバス・油絵具、ガラス
	フォンタナは1830年頃から抽象彫刻を制作し始めます。赤く均一に塗りこめられたキャンバスに穴を空け、不揃いな形のガラス片がはめ込まれています。平面作品と立体作品の中間的な作品にもみえます。初めてキャンバスを切り裂く作品を制作したことでフォンタナは有名です。					
	ゲルハルト・リヒター	1932-	旧東ドイツ・ドレスデン	《オレンジジェリー》	1982	キャンバス・油絵具
	キャンバスを2枚繋いだ巨大な画面上を、オレンジを基調とした様々な色彩が伸びやかに重なり合っています。作品の裏面をみると、赤い絵具の跡が面ごとにあります。様々な表情・絵具層の深みを出すため、キャンバスを縦横に並べ方を変えて描いたことがうかがえます。					
	ジョセフ・コーネル	1903-1972	アメリカ	《ホテル・フロレンス(ベニー・アーケード・シリーズ)》	1960年代半	ボード・コラージュ
	コーネルはコラージュという技法で作品を生み出した作家です。本作は鳥の写真を破いて貼り付け、周囲に幾何学模様をほどこし、幻想的な雰囲気を出しています。表面だけでなく裏面まで、様々なコラージュが彼の繊細なセレクトで施されています。					
	ジャクソン・ポロック	1912-1956	アメリカ	《無題》	1946	メゾナイト板・油絵具、エナメル、新聞紙コラージュ
	この作品でポロックは、絵具を滴らせるドリッピング、流しこむようなポーリングという技法と、新聞紙のコラージュを用いています。黄色を基調としたボード上を、縦横無尽に踊る黒いエナメルの線が印象的な作品です。					

作品図版	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
	フランク・ステラ	1936-	アメリカ	《タラデガ》	1981	アルミニウムハニカム・油絵具、オイルバー他
	「タラデガ」というのはアメリカのアラバマ州にあるサーキットの名前です。裏面をみると、軽快な色彩や形は、金属の組み合わせや金属的なハニカム構造の素材の融合から制作されていることがわかります。ステラはサーキットを題材に、色鮮やかでダイナミックな世界を創出しました。					
	トム・ウェツセルマン	1913-2004	アメリカ	《スモーカー #26》	1978	キャンバス・油絵具
	アメリカのポップ・アートを代表する作家の一人です。女性が煙草を吸う口元をクローズアップしており、唇と爪の鮮やかな赤色が目を引きます。裏面をみると「シェイプド・キャンバス」とよばれる、作家自らが理想の形にキャンバスを切り出し、手作りした様子が見えます。					
	パブロ・ピカソ	1881-1973	スペイン	《座る女》	1960	キャンバス・油絵具
	この作品は晩年に描かれたもので、形が大きくデフォルメされていますが、イスに腰かける女性の姿が表現されています。ピカソの作品は今もなお世界的に人気があります。今回裏面の写真を公開することは、原作者への協力になる可能性があるため、許可されませんでした。					
	アントニ・タビエス	1923-2012	スペイン	《ちいさな木とひも》	1973	キャンバス枠、木板・紐、油絵具
	画面に穴を空け、そこに紐を通して両面で結んでいます。裏側を見てみても、まるでこちらが作品の表側のようにも思える不思議な作品です。実際、外国のカタログには本作の裏側が「おもて」として掲載されたことがあります。					
	ジョルジュ・ルオー	1871-1958	フランス	《バシオン》	1943	キャンバス・油絵具
	イエス・キリストが裁判にかけられる場面を描いた油彩画です。人物たちの厳かな表情に緊張感が伝わってきます。重厚な絵の具の層が見どころのルオーですが、キャンバスの裏側からもそれが見て取れます。修復保全のため、今は裏画面がみられないような額装をしています。					
	ジャスパー・ジョーンズ	1930-	アメリカ	《消失Ⅱ》	1961	キャンバス・油絵具、アンコスティック、カラーージュ
	灰色で塗りこめられたキャンバスの上に同じサイズのキャンバスを貼り、まるで折り紙のように折り曲げられています。裏面を見てみると、表のひし形と同じ形に絵具が染みこんでいるのが見て取れます。大きな刷毛をどの角度・向きに動かしたのか、その軌跡をたどることができます。作品保護のため、今は裏面がみられないような額装をしています。					

その2 イスの てんじしつ いたずらも たまにはちょっと やるといい

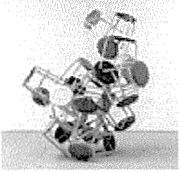
イスを「心地よく座る」という機能から解放すると、イスの見え方・接し方が変わってくるのではないかという森村氏の意図のもと、このコーナーではイスのインスタレーションを紹介しています。「いたずら」というより、イスと仲良くなるために、イスの色や形といったデザインや素材など、それぞれのイスの良さを一番強調して展示しています。

森村氏は、イームズやリートフェルト、柳宗理といった、トップデザイナーが手掛けたイスのデザインの面白さや機能美、倉俣のオブジェのような可憐なイスの美しさだけでなく、使い古されてきたシンプルなイスをたくさん集めることも行いました。

それぞれに似合ったインスタレーションを行っています。シンプルなイスたちには、その色の面白さに着目して、「いけばな」よろしく「いけイス」として、絶妙なバランスと即興性で組み立てたインスタレーションを行いました。（結果的に《イスのサーカス》と題されました。）個性あふれるイスたちにぜひご注目ください。みなさんが普段お使いのイスも、実はまったく違った一面をもっているかもしれません。

◎イスの制作年ではデザインされた年をd.と表記しています。

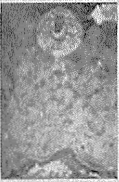
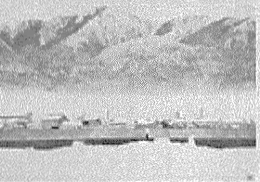
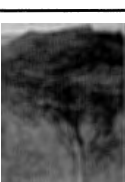
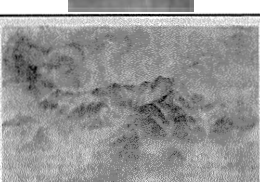
	森村泰昌	1951-	日本	《イームズチェアがおどるとき》	2020	インスタレーション
	作家蔵／ 旧富山県立近代美術館のホールで用いられていたイームズチェアを森村氏は「イス」の役目から解放し、楽し気にステップを踏む踊り子に変身させました。					
	チャールズ&レイ・イームズ	C.1907-1978/ R.1912-1988	アメリカ	《イームズシェルサイドチェア(スタッキングベース)》	d.1950-53	布、スチール、FRP
	このイスの座面の素材として使用されているFRP(繊維強化プラスチック)は、第二次世界大戦中のアメリカで、飛行機の機体軽量化技術が発展して生まれたものです。FRPは自由な曲面成型が可能だったので、イームズ夫妻は新しい時代に向けた家具デザインに用いました。					
	森村泰昌	1951-	日本	《バタフライ・スツールがとびまわる》	2020	インスタレーション
	作家蔵／ 協力:天童木工／ 蝶のような造形から《バタフライ・スツール》と名付けられたこのイスを、名前のとおり羽ばたかせ、日本画家の速水御舟の《炎舞》のような群れを目指しました。					
	柳 宗理(やなぎそうり)	1915-2011	日本	《バタフライ・スツール》	d.1956	ローズウッド材成型合板、銅
	曲げや折りを活かした曲面成型の部材を2つ、真鍮の金具で留め合わせるというシンプルかつ組み立ても簡易なスツールです。分解した部材を重ねてコンパクトに納めることができ、輸送上の効率も考慮されています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《バラいろのじんせい(ミス・ブランチ)》	2020	インスタレーション
	作家蔵(バラの造花)／ 《ミス・ブランチ》を貴婦人のように着飾ってもらおうとの発想から、造花のバラを敷き詰めたインスタレーションが出来上がりました。					
	倉俣史朗(くらまたしろう)	1934-1991	日本	《ミス・ブランチ》	d.1988 (製造:1994年頃)	アクリル、造花のバラ、アルミニウムパイプ(アルマイト染色仕上)
	この透明なアクリル製のイスは戯曲「欲望という名の電車」の主人公の女性であるブランチ・デュボアが着ていたバラ柄のドレスに由来します。透明な素材を用いることは、イスの量感や造形、機能への問いかけのようでもあります。アクリルがまだ一般的な素材でなかった当時、造花のバラは、ピンセットで入念に整えて配置したそうです。					

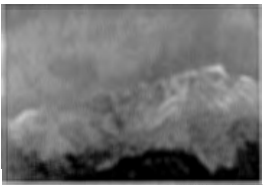
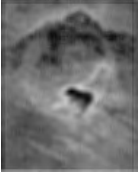
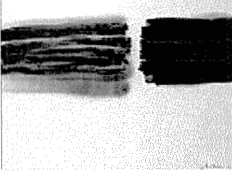
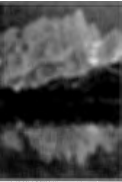
	作品図版	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
		森村泰昌	1951-	日本	《リートフェルトはロボットである》	2020	インスタレーション
		作家蔵 (ロボット)／ 《レッド・アンド・ブルー》の色と形に注目し、それに似合ったロボットを座らせてオブジェ化させよう! という森村氏の発想から生まれたインスタレーションです。					
(参考)		ヘリット・トマス・リートフェルト	1888-1964	オランダ	《レッド・アンド・ブルー》	d.1918-23 (製造:1990年代)	ブナ材、塗装仕上げ
		このイスのデザイナーであるリートフェルトは、家具職人から出発しました。このイスは、規格化された板材の部材の組み合わせによって肘掛イスを作り出すという試みから生まれました。発表当初は彩色が施されていませんでしたが、画家モンドリアンの目にとまり、イスの造形がデ・ステイルの理念に合致していることから、赤・青・黄の塗装を施すことを助言したといひます。					
		森村泰昌	1951-	日本	《イスのサーカス》	2020	インスタレーション
		作家蔵／ 事務用の使い古されたイスを使って作られたインスタレーション。「いけばな」ならぬ「いけイス」として、即興的に絶妙なバランスで組み立てられています。					

その3 やまのえがならぶ てんじしつ みんな ちがっているから おもしろい

富山県美術館のコレクションの中で一番多く描かれているテーマは、「立山連峰」です。1981(昭和56)年に富山県立近代美術館開館に際して、富山県の置県100年を記念し県内を取材して制作された「富山を描く100人100景」、その後の20点加わった「富山を描く120景」の全121点の中から選ばれた作品です。画家たちが様々なテーマやモチーフを求めて富山県内を取材し制作しましたが、一番多いモチーフは立山連峰にちなむものでした。今回のこの山の章のテーマに選ばれた立山連峰は、3千メートル級の山並みであり、まるで富山県を囲んでいるような連峰であり、劔岳などの峻険な山もこの連峰に含まれます。立山信仰といった精神面、立山アルペンルートといった観光面でも富山県には重要なものです。富山県のシンボルともいえるでしょう。森村氏は作品のジャンル・技法を問わず、1つのモチーフをどうとらえるのか、その画家たちのまなざし、テクニックの違いがよく分かるように、「やま」の作品を選びだしました。作家のキャリアや画壇での評価などに私たちがとらわれずに鑑賞できるように、あえて壁一面に大きく並べています。

○リストに掲載されていても展示されていない作品があります。◎本展関連カタログ(2020年、LIXIL出版)では21点の作品を森村氏は選びましたが、会場では作品の安全上から約15点に厳選しました。

		麻田鷹司 (あさだたかし)	1928-1987	日本	《立山》	1982	和紙・岩絵具
	幾重にも連なりそびえ立つ山々と豊かな川の流れが描かれています。麻田は、豪雪の後の昭和57(1982)年4月、季節外れの雪が降る富山市の常願寺川堤防を訪れ、天候によって変幻する立山連峰の姿に惹かれたといひます。早春の荘厳なる立山連峰を作者の心の眼でとらえた作品です。						
未展示		橋本龍美 (はしもとりゆうみ)	1928-2016	日本	《越中倶界波濤之図》 (えっちゅうぐかいのはとうのず)	1981	和紙・岩絵具
	橋本は新潟県出身の日本画家。郷里の加茂で、幼い頃から親しんだ、日本の風物、お化け、鬼、妖怪などが作品に登場します。本作でも、富山の山水、大岩不動山、五箇山の合掌造り、八尾の風の盆の踊り子たちなどが描かれ、橋本独自の越中富山の絵図が展開されています。						
未展示		畠中光享 (はたなかこうきょう)	1947-	日本	《朝暉》(ちょうき)	1983	綿布・岩絵具
	畠中は、富山県の北西部の都市、高岡市の二上地区に取材し、海岸越しに見える山々と工場地帯に惹かれたといひます。富山湾の向こうに現れる堂々とした立山連峰と土手沿いに広がる工場や住宅地の連なりが朝日に輝き、自然と人間の営みを感じさせる、独自の風景画となっています。題名どおり、朝の光の輝きが印象的です。						
		岩橋英遠 (いわはしえいえん)	1903-1999	日本	《北陸路五月に入る》 (ほくりくじごがつにはいる)	1981	和紙・岩絵具
	富山県の東端部に位置する朝日町からの北アルプス・立山連峰の眺めを描いています。田植えしたばかりでしょうか。前景の田園地帯には水が湛えられ、若々しい緑とまっすぐに続く農道が見えます。まだ雪が残る雄大な後立山連峰との対比が美しいです。自然豊かな風景をとらえ、富山の春の訪れを感じさせる作品です。						
		片岡球子 (かたおかたまこ)	1905-2008	日本	《立山》	1983	和紙・岩絵具
	戦後日本を代表する日本画家。本作のため、幾度も富山も訪れ、6度目の立山探訪でようやく雄山(立山)と劔岳の雄大な姿を目の前で見ることができたといひます。鮮やかな色彩と大胆な造形、躍動するような生命感あふれる、片岡独自の立山の表現に圧倒されます。						
		北山泰斗 (きたやまたいと)	1931-2006	日本	《立山幻想》	1979	キャンバス・油絵具
	標高3000m級の峰々が連なる北アルプスの立山連峰。その主峰である雄山(標高3003m)の西方に広がる緩やかな平坦地・室堂平は、立山連峰の名峰が見渡せ、大自然を満喫できる場所です。北山は、この場所で見出した、わずか2cmほどの高山植物からのイメージに触発されて、幻想的な草花が咲き誇る立山の風景を描きました。						
		小泉淳作 (こいずみじゅんさく)	1924-2012	日本	《常願寺川》(じょうがんじがわ)	1982	和紙・岩絵具
	山頂から落下し平野部へと流れる垂直な水の流れに対し、常願寺川の流れとそれに平行する山の稜線やたなびく雲、鉄道はほぼ水平に描かれ、造形的な構図をとっています。晩秋の葎の草原が、夕日に照らされ明るい黄土色に輝いて見えます。						
		今野忠一 (こんのちゅういち)	1915-2006	日本	《称名滝》(しょうみょうだき)	1982	和紙・岩絵具
	日本一の落差を誇る称名滝の姿を正面からとらえています。山肌は青く描かれ、かすかに陽が差し、滝の周りは対照的に明るく描かれています。なだらかに広がる広大な弥陀ヶ原から垂直に切れ落ちる地形に、スケールの大きさがよくあらわれています。						
未展示		中島千波 (なかじまちなみ)	1945-	日本	《立山》	1982	和紙・岩絵具
	室堂から望む雄山の姿が描かれています。雲間から覗く山頂の様子は、変わりやすい天候のせいか神秘的に感じられます。にわかに姿を現した山頂と、刻一刻と変化を続ける雲の動きの様子を、箔の下地の上に色彩を抑えながら見事に描いています。						

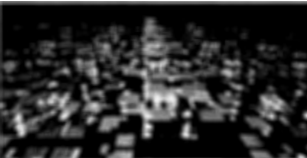
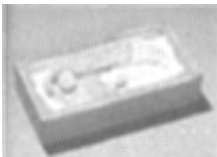
作品図版		作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
		小野 末(おのすえ)	1910-1985	日本	《剣岳》(つるぎだけ)	1979	キャンバス・油絵具
		どの地点から取材したかわかりませんが、小野は立山連峰を裏側から見た風景が好ましかったようです。色彩を抑え、堅ろうなマチエールで描かれた陰しい岩肌の山頂の様子は、写実的というよりはむしろ抒情的に感じられます。					
		下田義寛(しもだよしひろ)	1940-	日本	《山の朝》	1983	和紙・岩絵具
		緑の画面には木目が透かし込まれ、そこにライチョウの親子がクローズアップされて描かれています。版の要素を日本画に採り入れた下田独自の表現です。雄大な立山のシルエットによる自然の厳しさと、そこに生きる親子の愛情が幻想的に描かれています。					
		高田 誠(たかだまこと)	1913-1992	日本	《剣岳》(つるぎだけ)	1979	キャンバス・油絵具
		剣岳登山の基地として知られる馬場島(ばんばじま)の宿舎から見た剣岳を、点描で描いてあります。近景には緑の木々を、中景にはうっすらと雪化粧した山を、そして遠景にはそびえ立つ雪の剣岳をそれぞれ様々な色彩のドットを組み合わせて柔らかなタッチで表現しています。					
未展示		田村一男(たむらかずお)	1904-1997	日本	《白い道》	1981	キャンバス・油絵具
		油彩画でありながら、重厚な日本画を思わせるような絵肌が印象的です。室堂ターミナル周辺の、道路の雪を除雪して現れる雪の壁「雪の大谷」。高さ20mにも迫る雪壁による白の世界を、雪深いこの地の人の生活を思いながら描いたといえます。					
		司 修(つかさおさむ)	1936-	日本	《雪女》	1981	キャンバス・油絵具
		宇奈月温泉近くに伝わる雪女の伝説に触発された作品で、雪山の上に巨大な雪女の姿が描かれています。「えものがたり」を得意とする司の特徴が良く出ており、実際にありえない、夢の中のシーンのような幻想的な光景が広がっています。					
		津高和一(つたかわいち)	1911-1995	日本	《気一立山にて》	1978	キャンバス・油絵具
		タイトルのとおり、立山の「気」を抽象的に表現しているのでしょうか。抒情性にあふれる太く黒い線がとても印象的です。何をどう描くということではなく、感じたことを形にしたような、抽象絵画のパイオニアとして活躍した津高らしい作品です。					
		山岸 純(やまぎしじゅん)	1930-2000	日本	《霞韻黒部》(さんいんくろべ)	1982	和紙・岩絵具
		初冬の黒部峡谷、青々とした山に紅葉の名残が混じっています。雪霞(ゆきあられ)の乱舞する様子を胡粉(日本画の白い絵の具)のひまつで表現するなど、連岳の美しい姿を眺めながら自然と一体化した山岸の心境を見事に描き出しています。					
		大野俊明(おおのとしあき)	1948-	日本	《白銀の峰》(はくぎんのみね)	2004	麻紙・岩絵具、水彩絵具、墨
		富山市郊外の、呉羽山展望台から冬の立山連峰を望んだ風景です。褐色の枯葉が残る前景の山と銀嶺の峰々の対比が美しい作品となっています。富山市を南北に流れる神通川の向こうに見える、ビルの立ち並ぶ富山市街は、創作的に構成されています。					
未展示		嶋 剛(しぎこう)	1943-	日本	《2004.5.6.16:00》	2004	キャンバス・油絵具
		何の変哲もない駐車場の光景をスナップ写真のように描いています。どこにでもある風景のようですが、背後にそびえる立山連峰の存在がそれをまったく違う印象に変えています。写真の視覚に注目した表現により、とてもリアルな作品になっています。					
未展示		矢橋六郎(やばしろうろう)	1905-1988	日本	《連峰初冬》(れんぼうしようにう)	1980	キャンバス・油絵具
		矢橋は立山連峰を描くにあたって、11月から12月の初冬にかけて富山を旅し、取材を行いました。天候に恵まれなかった取材旅行の中、黒部渓谷での写生の帰り道に、立山町近くでようやく朝霧の中の連峰の姿を見ることができたといえます。					
		奥田元宋(おくだげんそう)	1912-2003	日本	《剣》(つるぎ)	1966	和紙・岩絵具
		奥田が富山県展審査員として来県した折に、富山県を代表する山である剣岳を実際に登山して取材し、制作した作品です。朝日をうけた剣岳の雄大さと、仙人池に山々が鏡のように写りこむ様子を、奥田が得意とした赤色を効果的に用いながら清々しく描いています。					
未展示		相原求一朗(あいはらきゅういちろう)	1918-1999	日本	《剣岳早春》(つるぎだけそうしゅん)	1980	キャンバス・油絵具
		富山県の名峰・剣岳の早春の風景が描かれています。相原は、北海道の原野に自らの原風景を見出し、ライフワークとして描き続けた洋画家です。本作では雪の残る剣岳の大自然を、色調を抑え、厳しさと詩情をたたえた姿で表現しています。					
		清原啓一(きよはらけいいち)	1927-2008	日本	《雷鳥》	1982	キャンバス・油絵具
		群鴉の画家として知られる清原は、雷鳥に会いたい一心で、雪の残る立山の室堂を取材していました。休憩時、美しい羽根と鶏冠の雷鳥に気づき、急いでスケッチしたといえます。山と空を見つめる堂々とした姿の雷鳥は、さながら立山の主であるかのようです。					

	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
その4 オブジェの てんじしつ いしころの こえをきく						
詩人・美術評論家の瀧口修造（1903-1979）は、第二次世界大戦前はシュルレアリスムを日本に紹介した一人として、戦後は国内外の前衛的な芸術表現をみつめ、擁護した存在として知られます。「瀧口修造コレクション」は、瀧口がなくなるまですごした東京・西落合の自宅書斎に私蔵していたものたちです。旅先の思い出の品や名もなきオブジェ、また有名無名を問わず瀧口と交流のあったさまざまなアーティストたちからの贈り物などの集まりです。普段は当館の3階・展示室6でご覧いただくことができます。（本日もご覧いただけます。） 今回は、内側が黒色のケースには、瀧口コレクションの中から森村氏がセレクトしたものを展示。一方、白色のケースには、森村氏自身がつくった遊び心のあるオブジェを展示しています。 さて、たくさんのモノがあふれる現代において、誰がその価値の優劣をつけているのでしょうか?大切だと思う気持ちがある価値の根幹であることを、森村氏は自身の「森村泰昌コレクション」を並べることで私たちに伝えてくれます。 ◎作家名のない品は、全て瀧口による採集品や手元に置いていたもの、作品名不詳のものです。						
たきぐちしゅうぞう コレクション						
			〔石／山口勝弘からの贈り物〕	不詳	石	
			〔フィレンツェで取得したビー玉〕	1958採集	ビー玉	
	瀧口修造	1903-1979	日本	《Souvenirs de Cadaqués（カダケスの記念品）》	1958採集	箱、石8個、貝殻12個、押し花
			〔ポーカーマシン（玩具）〕	不詳	プラスチック	
			〔熊形のテラコッタ〕	不詳	テラコッタ	
	合田佐和子（ごうださわこ）	1940-2016	日本	《天使の缶詰》	1969	瀬戸物の人形、空缶
			〔エコー（煙草の箱）のオブジェ〕	不詳	プラスチック・メタル	
	ジャスパー・ジョーンズ	1930-	アメリカ	〔エコー（煙草の箱）〕	1966頃	紙箱・墨
			〔へそ時計〕	不詳	金属、プラスチック	
			〔爬虫類の革製ケース〕	不詳	爬虫類の革、草	
	合田佐和子	1940-2016	日本	《イトウルビ（女の顔）》	1969	紙粘土、アクリル絵具、クリアラッカー
	田中敦子（たなかあつこ）	1932-2005	日本	〔油彩〕	制作年不詳	紙・油絵具
未展示	藤松 博（ふじまつひろし）	1922-1996	日本	《滝口さん》	1969	紙・インク
未展示	福田繁雄（ふくだしげお）	1932-2009	日本	《かたつむりの筆立て》	1965	銅板
	中西夏之（なかにしなつゆき）	1935-2016	日本	《The Second Portrait of Shuzo Takiguchi》	1969	木、ガラス、金属玉、水銀、針金
	三木敏弘（みぎとしひろ）	1941-	日本	《701》	制作年不詳	アルミニウム、木製ケース
			〔モナリザのカフスポタン〕	不詳	金属	
			〔蛇口〕	不詳	錫	
未展示	伊藤隆康（いとうたかやす）	1934-1985	日本	〔アルミのオブジェ〕	制作年不詳	アルミニウム
未展示	合田佐和子	1940-2016	日本	《メケ・メケ》	1963	真鍮、ガラス、瓶、ネックレス、恐竜の作り物
			〔アリスとディートリヒのモノクローム写真〕	不詳	写真、額	
			〔ヒヨコの入った小卵〕	不詳	卵の殻、紙、モール製のヒヨコ	
	中辻悦子（なかつじえつこ）	1937-	日本	《ボコビン》	1963	布、羽毛、ビーズ
			〔立体視のカード〕	不詳	紙、印刷	
	合田佐和子	1940-2016	日本	《黄色の侍女》《赤の侍女》	1962頃	ガラス、木の浮き、蠟、毛糸
未展示	合田佐和子	1940-2016	日本	《八月の王》	1963	木の浮き、ガラス、銅線、蠟、クリアラッカー
			〔アリスのパズルと煙草の巻紙（イタリア製）〕	不詳	紙、ガラス、装飾玉	
未展示			〔Tender Buttons〕	1973採集	金属、プラスチック	
			〔バッジ〕	不詳	ボール紙、ピン	
	合田佐和子	1940-2016	日本	《眼》	1966頃	金属、ガラス、アクリル絵具
未展示	荒川修作（あらかわしゅうざく）	1936-2010	日本	《Subject/and/subjects/verbing/the/distance/forming》	1978	紙、鉛筆、インク
	ブルーノ・ムナリー	1907-1998	イタリア	《ジョコABC》（アルファベット・パズル）	1960	樹脂
未展示	鈴木 亘（すずさわわたる）	1941-	日本	《Man Ray's Lip & Carve-Line》	1974	樹脂
	荒川修作、マドリン・ギンズ	荒川:1936-2010 ギンズ:1941-2014	日本 アメリカ	〔《漂流物 標本函》の写真〕	1974頃	アクリル・ケース、写真（30枚）
			〔「JAPAN MONOPOLY CORPORATION」のメダル原形〕	不詳	石膏	
未展示	ジョアン・ミロからの贈り物	1893-1983	スペイン	〔ミロのカラバサ〕	1976贈呈	植物
未展示	綾囀（あい・おう）	1931-	日本	《フィンガーボックス》	1965頃	紙、スポンジ
未展示			〔穴の空いた円錐〕	不詳	陶	
	藤田昭子（浜の子造形）	1933-	日本	《舞》《猿》《羊》	1978頃	テラコッタ
未展示			〔モルフォ蝶〕	不詳	蝶の標本	
もりむらやすまさ コレクション						
			森村泰昌による制作物		作家蔵	

作品図版	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
------	-----	-----	-----	-----	-----	-------

その5 りったいさくひんの てんじしつ おおきなうちゅうは ちいさなはこの なかにある

大切なものは箱にいれるからでしょうか?保管や運搬がしやすいからでしょうか?無意識からでしょうか?なぜか美術作品には箱型の作品がたくさんあります。箱の中に作家が思う世界が集約されて、見た人の心にひろがっていく…その効果を狙っているのかもしれませんが。この章では、形態が「はこ」ということにこだわり選んだ作品をご紹介します。その中でも森村氏の新作2点、《Du 茶庵》と《ヴィトリヌのためのミラー・ボックス》があります。前者は、マルセル・デュシャン《トランクの箱》(特装版)を含む彼の作品全体へのオマージュ作です。後者は、山口勝弘の《ヴィトリヌ No.1》へのオマージュです。この2点は中をそっと覗きみることができる作品です。無限に広がる箱の世界をお楽しみください。

	マルセル・デュシャン	1887-1968	フランス	《トランクの箱》(特装版)	1946	革製のトランクに納められたデュシャンの主要作品の複製及びオリジナル作品
	デュシャンの主要作品の絵画やオブジェを複製した印刷物や模型、計69点が箱に納められています。本作は特定の人のために制作された、限定20部(後に4部追加)のうちの1点であり、限定番号は12です。箱の内側に贈った相手の名前が刻印されており、本作には《罪のある風景》と題された絵画がつけられています。					
	マルセル・デュシャン	1887-1968	フランス	《トランクの箱》	1955-68	デュシャンの主要作品の複製写真及びレプリカ(ケース入り)
	こちらの《トランクの箱》は特装版とは異なる、番号無しの普及版です。20数年にわたって約300部が制作されています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《Du 茶庵》	2020	ミクストメディア
	作家蔵／ 《トランクの箱》(特装版)を含むデュシャン作品をオマージュした箱作品。右下の覗き穴から箱の中を見てみると、森村氏がデュシャンに扮装した数々の作品のミニチュアと出会えます。					
	山口勝弘	1928-2018	日本	《ヴィトリヌ No.1》	1952	ガラス、油彩、板
	若い表現者のグループ「実験工房」の展覧会で、山口が発表した作品です。格子柄のチェッカーガラスを組み合わせた作品を覗くと、箱の中でいくつもの矩形が浮遊し、見る者の動きに従って揺れ動いて見えます。テクノロジーの発展前夜に“動く絵画空間”を拡げたこの小さな箱を、瀧口修造が「ヴィトリヌ」(飾窓)と名付けました。					
	森村泰昌	1951-	日本	《ヴィトリヌのためのミラー・ボックス》	2020	ミクストメディア
	作家蔵／ 《ヴィトリヌ No.1》から着想を得て制作されたオマージュ作品です。一見するとただの箱にしか見えませんが、覗きこんでみると《ヴィトリヌ No.1》風の宇宙空間が広がっています。作品図版は作品をのぞいた様子です。					
	ジョセフ・コーネル	1903-1972	アメリカ	《砂の箱》	1950年代末	木箱、ガラス、着色された砂、プラスチックボール
	コーネルが1930年代より数多く制作した箱のオブジェの一つです。ニューヨーク郊外の自宅で制作された箱の中には砂が敷かれ、白いボールが放たれています。砂は広大な海を、球体は星々、地球、卵といった生命体を連想させ、いずれもコーネルが好んだモチーフでした。閉じた箱の中での砂とボールの出会いに作者が託した想いを巡り、それを見る私たちの想像の世界も広がります。					
	ケイト・ミレット	1934-2017	アメリカ	《罨》	1967	木、革靴、鎖
	この作品は、1968年瀧口、針生一郎らの企画による「反戦と解放」展(村松画廊、日本画廊ほか)に出品するため、ニューヨークから瀧口に送ったものです。しかし、途中で行方不明となり、会期に間に合わず、彼女の意向によりその後は瀧口の書斎で保管されることになりました。					
	アルマン	1928-2005	フランス	《バイオリンの凝結》	1971	バイオリン・アクリル樹脂
	バイオリンを叩き壊し、出来上がった残骸を樹脂でキューブ状に固めた作品です。アルマンの作品は、主に楽器や刷毛やゴミなどの日常的なものを、破壊・切断、焼却し、再び蓄積したものであり、それらは私たちに物を持つこと、使うこと、捨てることの意味を問いかけてきます。					
	加納光於(かのうみつお)・大岡信(おおおかまこと)	加納 1933-/大岡 1931-2017	日本	《アララットの船あるいは空の蜜》	1971	ミクストメディア
	独創的な版画作品によって国内外で高く評価されてきた加納と、詩人大岡の共同作品です。詩画集として制作を進めていましたが、箱状のオブジェとなりました。内部は加納の制作ノートや大岡の詩集、独自に制作された部品で構成されています。					
	中西夏之(なかにしなつゆき)	1935-2016	日本	《コンパクト・オブジェ(卵)》	1962年頃	樹脂等
	日常の雑多なものをアクリル樹脂で卵状に固めたオブジェ。中西夏之は1963年に赤瀬川原平、高松次郎とともにハイレッドセンターを結成し、「直接行動」と称されるイベントやハプニングを行いました。コンパクトオブジェはこうしたイベントでも使用されました。					
	荒川修作(あらかわしゅうさく)	1936-2010	日本	《知覚の肉》	1958	木、セメント、金属、布
	荒川は1960年に篠原有司男、吉村益信らと共にネオ・ダダイズム・オルガナイズースを結成し、反芸術的な創作活動を始め、この頃、セメントの塊を箱に収めた、奇怪な棺桶を思わせるオブジェを制作しました。					
	赤瀬川原平(あかせがわけんぺい)	1937-2014	日本	《「千円札梱包一壘」押収品》	1964年頃	紙、ガラス瓶
	赤瀬川は1963年、自身の個展の案内状に千円札の印刷を用い、また同年の読売アンデバンダン展に千円札を手書きで拡大した作品を発表しました。千円札は赤瀬川の主要なモチーフとなりましたが、作品は通貨及証券模造取締法違反に問われて裁判となりました。これはその際に押収された品の一つです。					
	石田歩(いしだあゆむ)	1957-	日本	《工作少年の夢(トロッコ島)》	1992	ミクストメディア
	夜な夜な工作に耽る少年の姿をはじめ、彼の作るトロッコ島や制作のためのメモなどがレリーフ状に展開された作品です。扉を閉じると箱として収納できる、「工作少年」石田歩による箱作品。工作オタクの遊び心と制作の喜びが伝わってきます。					
	工藤哲巳(くどうてつみ)	1935-1990	日本	《染色体の迷宮で消え失せない光》	1979	鳥籠、ミクストメディア
	鮮やかな無数の糸が絡みつく籠の中に、人面と両手、蠟燭が収められています。蠟燭を前に祈りをささげているようにも見えますが、両手の間には糸が張られ、綾取りをしていることがわかります。工藤は、1979年頃に鳥籠と人面、糸が絡みつく作品を集中的に制作しました。					
	森村泰昌	1951-	日本	《海の幸・戦場の頂上の旗》(映像作品)の箱	2010	ミクストメディア(本、桐箱、漆塗り、DVDディスク、カラー写真、アクリルなど)
	青木繁の油彩画《海の幸》(1904年、重要文化財)や「硫黄島の星条旗」の報道写真(ピューリッツァー賞受賞)から着想を得て制作した映像作品を納める箱です。漆塗りの箱に「宇美能佐知」(＝海の幸)の文字があり、中には旗を掲げる兵士たちの写真とDVDが納められています。*映像作品は3/21、22、23の上映会で上映します。					

作品図版	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
------	-----	-----	-----	-----	-----	-------

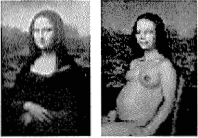
その6 モリムラびじゅつし はくぶづかん ほんきでまねると ほんものになる

森村泰昌氏の作品の制作手法は一風変わっています。古今東西の名画や往年の映画女優、20世紀の歴史的事件の人物などの写真作品なのですが、その登場人物はすべて森村氏自身なのですが、なりきる人物に関する文献などを読み深く知り、写真を撮影するためにセットをつくりあげ、衣装を制作して身に着け、精巧なメイクや、自分をキャンパスのようにして絵の具を塗ったりしながら、作品の中の人物に扮します。森村氏の大胆な解釈によって、本物の作品とは異なる本気さと作品の新たな視点を私たちに与えてくれるでしょう。合成写真やデジタル処理に慣れてしまった現代の私たちには、手間をかけたこの制作手法はかえって新鮮です。自分の頭も心も体も総動員で使って作品をつくる森村氏は、「ほんきの美術のあそび」のプロなのです。

本展では、レオナルド・ダ・ヴィンチやフェルメールなど、西洋美術の流れの中で著名な作品や芸術家の自画像に扮した森村氏の作品を、富山では初めて大々的にご紹介します。

森村氏は1985年以降、約35年にわたり、この特殊な制作方法でセルフポートレイト作品を発表し続けています。ひとりの人間が一体どれだけ変身しているのか、じっくりご覧ください。

また、富山県美術館所蔵のミロの作品をモチーフにした新作《ほんきであそぶとせかいはかわる(ミロA.B)》は初公開です。◎参考作品は、森村氏が自作制作の際に参考もしくはオマージュとしてさざげた作品です。

	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史(レオナルドの顔が語ること)》	2016/2018	雁皮紙・ビエゾグラフ
	作家蔵／ 「このようなりつばな髭とはげた頭を持った権威ある"おっちゃんたち"によって歴史はつくられていくものだという歴史観が根強くあって、その原点に位置するのがほかならぬレオナルド・ダ・ヴィンチの公式ポートレイトであったのだと私はとらえたい」(『自画像のゆくえ』光文社新書、2019年)と森村氏は本作について述べています。					
参考	レオナルド・ダ・ヴィンチ	1452-1519	イタリア	《自画像》	1490または1515-16年頃	紙・赤チョーク
	イタリア／トリノ王立図書館蔵／ レオナルドは盛期ルネサンスを代表する画家であり建築家であり研究者。レオナルドの自画像であると言われているものが、本当に自画像であるかどうかは学説が分かれており、その確たる証拠もありません。					
	森村泰昌	1951-	日本	だぶらかし／モナリザ	1998-2010	レンチキュラー版
	作家蔵／ 見る角度によって、モナリザの絵が切り替わる仕組みです。「モナリザは妊娠していたかもしれない!?」という森村氏の想像から、表層のみの美術のあり方についても問いかけるような、面白い仕掛けを提案しています。レンチキュラーの特徴、左右によってみえ方が異なる点も活用しています。					
参考	レオナルド・ダ・ヴィンチ	1452-1519	イタリア	《モナリザ》	1503-19年頃	ポプラ板・油彩
	フランス／ルーヴル美術館蔵／ レオナルドの代表作にして、最も有名な絵画の一つ。画家は「スフマー」 という輪郭線を描かない技法を用いることによって、女性の神秘的な微笑みを生み出しています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史(赤いターバンのファン・エイク)》	2016/2018	カラー写真、透明メディウム
	作家蔵／ ヤン・ファン・エイクの自画像は「美術史上初めての自画像」と言われています。まるで鏡のように鮮明に自画像を描き切った画家に扮することは、セルフポートレイト作品を制作する森村氏にとっても意義深いことなのです。					
参考	ヤン・ファン・エイク	1390頃-1411	ベルギー	《ターバンの男の肖像》	1433年	板・油絵具
	イギリス／ロンドン・ナショナルギャラリー蔵／ 北方ルネサンスを代表する画家。兄フーベルト(1416没)とともに初期ネーデルランド絵画の創始者および油彩画の発明者と言われており、緻密な描写が特徴的です。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史(デューラーの手は、もうひとつの顔である)》	2016/2018	カラー写真、透明メディウム
	作家蔵／ 森村氏はデューラーの自画像における巧みな構成力に注目しました。中でも重要なのは、特徴的なポーズをとる右手です。森村氏の["手"はもうひとつの"顔"である]との考えのもと、指の向きなど細部までポーズングのこだわりが感じられます。					
参考	アルブレヒト・デューラー	1471-1528	ドイツ	《28歳の自画像(1500年の自画像)》	1500	板・油絵具
	ドイツ／アルテ・ピナコテーク蔵／ ドイツ・ルネサンス最大の画家と言われるデューラーのこの自画像は、当時キリストを描くときにしか使われなかった正面向きのポーズが用いられています。毛先など細部まで綿密に描写され、表情は自信にあふれています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史(カラヴァッジョ／マタイとは何者か)》	2016	カラー写真
	作家蔵／ 登場人物全員を森村氏のみで演じ切っている点がポイントです。右端の人物がイエス、左端で俯く人物をマタイとし、「実はマタイはカラヴァッジョの自画像では?」という考えのもと、聖なるイエスと世俗的な人間マタイとに、ポーズングや明暗などを対照的に表現しています。					
参考	ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ	1571-1610	イタリア	《聖マタイの召命》	1600年頃	キャンバス・油絵具
	イタリアのローマ／サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂蔵／ イタリア・バロック様式を代表するカラヴァッジョのこの作品は、画家が得意とした劇的な明暗によって表現されています。聖書の一場面が描かれており、登場人物それぞれの迫真のあるポーズや表情が見どころです。					
	森村泰昌	1951-	日本	《美術史の娘(王女A)》	1989	カラー写真、透明メディウム
	作家蔵／ ペラスケスが可憐に描いた王女に対して、森村氏の扮した王女はなんだか少し不気味な感じがするかもしれません。忠実になりきるのではなく、森村エッセンスがふんだんな作品となっています。					
参考	ディエゴ・ペラスケス	1599-1660	スペイン	《白と銀のマルガリータ王女》	1656年頃	キャンバス・油絵具
	オーストリア／ウィーン美術史美術館蔵／ スペインの宮廷画家として活躍したペラスケスが描いた王女の肖像です。ドレスは踊るような素早いタッチで描き出されていますが、光沢や装飾部分を巧みに彩っています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史(レンブラントの遺言)》	2016	カラー写真
	作家蔵／ レンブラントの生涯にわたる多くの自画像を総覧し、森村氏はできばえのいい芝居を見せてもらったようだといい、レンブラントを「名優」と評しました。数々のレンブラントに扮していますが、その老齢の名優をも森村氏はまた装ったのです。					
参考	レンブラント・ファン・レイン	1606-1669	オランダ	《自画像(63歳)》	1669	キャンバス・油絵具
	オランダ／マウリッツハイス美術館蔵／ オランダ・バロックを代表する画家。人間の感情が表れる顔を身近なモチーフとし、自己の内面を見つめるように、生涯にわたり自画像を幾度も描いています。中でも森村氏が扮した自画像は、レンブラントの晩年のものです。					
	森村泰昌	1951-	日本	《フェルメール研究(わが町に何を注ぐか)》	2019	キャンバス・インクジェットプリント
	作家蔵／ 森村氏は名画などに扮するとき、まずその対象について調査・研究を行います。この作品についても光の入り具合やモチーフの角度など、実に細かく研究し、その再現を行っているのです。					
	森村泰昌	1951-	日本	《モリメール写真館》	2019	カラー写真
	共同制作:和田大象、吉村睦人、大貫正恵、吉田恵子／個人蔵／ 森村氏のプライベート美術館「モリムラ@ミュージアム」では、《牛乳を注ぐ女》を一般の方が実際に体験する試みを行いました。今回お見せしている、一般の方4名が扮装した作品も、見比べてみると同じ格好をしてもそれぞれの個性が見えてきます。					
参考	ヨハネス・フェルメール	1632-1675	オランダ	《牛乳を注ぐ女》	1660頃	キャンバス・油絵具
	オランダ／アムステルダム国立美術館蔵／ オランダ・バロック期の画家。歴史画を制作していたフェルメールが風俗画家として活躍する転換期の作品です。日常のワンシーンを取り切ったような画面は、構図や色彩の面で配置やバランスが緻密に構築されています。					

作品図版	作家名	生没年	出身地	作品名	制作年	技法・材質
	森村泰昌	1951-	日本	《フェルメール研究（振り向く鏡）》	2008	キャンバス・写真加工
	作家蔵／ フェルメールの可憐で魅力的な少女と見比べてみると、森村の少女はどこか艶やかな女性のようにです。作品を見て何を感じるかは人それぞれです。ただ忠実に少女をまねるのではなく、森村氏なりの印象や解釈がここには存在しています。					
参考	ヨハネス・フェルメール	1632-1675	オランダ	《真珠の耳飾りの少女》	1665年頃	キャンバス・油絵具
	オランダ／マウリッツハイス美術館蔵／ 少女のモデルの詳細は不明。鉾石ラピス・ラズリを粉碎・精製した顔料で描かれた、ターバンの群青色（フェルメール・ブルーと呼ばれる）が印象的な作品。					
	森村泰昌	1951-	日本	《私の中のフリーダ（生きる）》	2001	カラー写真
	作家蔵／ 森村氏はフリーダ・カーロを悲劇的な女性ではなくハンディやナショナリティを巧みに用いセルフプロデュースを行った一人の画家として捉えています。フリーダ・カーロに扮した森村氏の堂々と華やかな姿をご覧ください。					
参考	フリーダ・カーロ	1907-1954	メキシコ	《希望の樹、しっかりと立て》	1946	メゾナイト・油絵具
	個人蔵／ 不慮の事故に巻き込まれ、後遺症に苦しみながら描いた作品。左側に傷跡を見せて横たわったフリーダ自身、右側は民族衣装に身を包み、こちらに視線を向けるフリーダの肖像で、その右手の旗に「希望の樹、しっかりと立て」という文字が書かれています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《私の中のフリーダ（自分との対話1）》	2001	カラー写真
	作家蔵／ フリーダの内面の複雑さやそのセルフプロデュースに注目して、2つの自画像が横並びするこの作品を選び扮装。メキシコとヨーロッパの混血である自分、愛する元夫との決別を象徴するハサミ、しかしまだ流れおちる赤い血。決別しきれない思いや悲しみにみちています。2人ともにある色鮮やかな心臓は、まるで彼女の生きる力の源のようです。					
参考	フリーダ・カーロ	1907-1954	メキシコ	《2人のフリーダ》	1939	キャンバス・油絵具
	メキシコ／メキシコ・シティ近代美術館蔵／ 2人の女性はどちらもフリーダの自画像です。右側はメキシコ伝統の民族衣装に身をつつむかつて元夫に愛された自分、一方左側の白いドレスはもはや愛されなくなった自分を対比的に描いています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史（マグリット／三重人格）》	2016	カラー写真
	作家蔵／ 森村氏のマグリットは、実際のマグリット自身の作品と比べると、描かれた鳥が立体的に飛び出している点や入れ子構造になっているなど、森村氏の解釈によって独自の発展がうかがえるのが見どころです。キャンバスだけでなく、イーゼルやパレット、イスも作品の一部です。					
参考	ルネ・マグリット	1898-1967	ベルギー	《透視》	1936	キャンバス・油絵具
	個人蔵／ マグリットはシュルレアリスムを代表する画家の一人。日常に潜む不条理の世界を、意表をついた表現で露呈する作風を確立。画家の数少ない自画像の一つです。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史（子供のためのアンリ・ルソー）》	2016	カラー写真
	作家蔵／ ルソーに扮した本作の制作にあたり、今回展示しているジオラマもつくられました。本作とジオラマを見比べていただくことで、森村氏が制作・撮影を行う過程がうかがえます。					
参考	アンリ・ジュリアン・フェリックス・ルソー	1844-1910	フランス	《私自身、肖像＝風景》	1890	キャンバス・油絵具
	チェコ／プラハ国立美術館蔵／ 素朴派の画家の自画像。独学で絵を勉強し、写実と幻想を混ぜ合わせたような独自の画風を確立します。ピカソなど後世の画家に影響を与えました。					
	森村泰昌	1951-	日本	《自画像の美術史（ゴッホ／青）》	2016	キャンバス・インクジェットプリント
	作家蔵／ 森村氏が名画の扮装を始めたのは、ゴッホ（1985年制作）からでした。本作で森村氏は、ゴッホが狂気と正気の間をさまよいながら描いた、混沌とした青い渦の自画像に扮装。ゴッホ同様森村氏自身も画家の狂気と正気の狭間に身を置き、じっとこちらを見つめています。					
参考	フィンセント・ファン・ゴッホ	1853-1890	オランダ	《自画像（渦巻く青い背景の中の自画像）》	1889	キャンバス・油絵具
	フランス／オルセー美術館蔵／ 後期印象派の画家。鮮やかな色彩とタッチが特徴的で、生涯で自画像を何度も描いています。この自画像は、大親友だったゴーギャンと別れた後、精神病院を入退院してから描かれました。青く渦巻く背景が、画家の不安定な精神を表わしているようです。					
	森村泰昌	1951-	日本	《もうひとつのマリリン》	2015	カラー出力パネル
	作家蔵／ マリリン・モンローに扮した本作は、マリリンと森村氏をもじった「モリリン」という愛称で呼ばれるほど愛されている作品です。森村氏は写真でも映像でもたくさんの「マリリン」に扮しています。ウォーホルが起用したモチーフのひとつ「マリリン」が森村の手によってどう変化したかご注目ください。					
	アンディ・ウォーホル	1928-1987	アメリカ	《マリリン》	1967	紙・シルクスクリーン
	アメリカのポップ・アートを代表するグラフィック・デザイナー。シルクスクリーンで刷られた本作は、ウォーホルによってそれぞれ色指定がなされています。「マリリン」というハリウッドの有名女優のイメージを大量生産することで、その個性や意味が曖昧になっていくことを表現しています。					
	森村泰昌	1951-	日本	《ほんきであそぶとせかいはいかわる（ミロ A）》	2020	カラー写真
	当館所蔵作品で遊びに相応しいものとして、森村氏に選ばれたのがミロでした。まるで子どもの描いた絵のようだと評されるミロですが、森村氏が扮することで、作品の穏やかで静ひつな色彩をうかがい知ることができます。					
	森村泰昌	1951-	日本	《ほんきであそぶとせかいはいかわる（ミロ B）》	2020	カラー写真
	ミロBと題されたこちらの作品は、別の角度からみた森村氏のミロです。別の角度からみることで、画像処理ではなく、森村氏が自らの体に絵の具をぬり、黄色い煙と黒いパイプ、目の部分を一つに繋げるなど、工夫しながら制作していることが分かります。					
	ジョアン・ミロ	1893-1983	スペイン	《パイプを吸う男》	1925	キャンバス・油絵具
	自由でユーモラスな雰囲気漂うミロの作品は、よく子どもの描く絵に例えられます。ミロは無意識に形作られる色や造形を大事にして、丁寧に制作していました。この作品がどこか夢の世界のような雰囲気をもっているのはそのためだからでしょうか、優しさに満ちた作品といえるでしょう。					

富山県美術館企画展「森村泰昌のあそぶ美術史ーほんきであそぶとせかいはいかわる」 会期:2020年3月7日～5月10日

本展について： ゲストキュレーター 森村泰昌／ ポスター・チラシ及び会場グラフィック監修 三木健デザイン事務所（三木健、犬山蓉子）／ 会場施工監修 日埜建築設計事務所（日埜直彦）

この作品リストは、富山県美術館で編集・作成（ミニ解説は同館学芸員、各章解説は渡辺希利子、編集は湯佐明子が担当）。発行 富山県美術館／2020年3月